

「楽しそうな声が向こうまで聞こえましたけど、どうしたんですか？」

声が聞こえた方へと近藤と千鶴の顔が向けられる。

そこには道着を身に纏つた総司の姿があつた。緩められている襟元から覗く胸元に汗が滲んでいる。たつた今まで稽古をしていたのだろう。

「おお、総司。ん・・・ずっと稽古していたのか？」

「はい。精神を集中させたくて竹刀を振つていたらつい熱中しちゃいました」

「ほう、精神統一か。感心、感心。だが、早く着替えないと遅刻するんじゃないのか？」

「もう、そんな時間ですか。すぐにシャワー浴びて着替えてきます。・・・・そういえばなんの話をしていたんですか？『お嫁』がどうの、とか聞こえた気がするんですけど」

「ああ。千鶴くんはいいお嫁さんになるな、と話していたんだ。兄の目から見てもそうは思わんか、総司」

「・・・・・そうですね。凄く出来たお嫁さんですよ、千鶴・・・ちゃんは」

総司は一瞬だけ何ともいえない表情をしたが、それを直ぐに隠すかのように微笑みを浮かべた。

「そうか、総司もそう思うか」

「はい、もちろんです」

「総ちゃんまで！！」

「そんなに恥ずかしがらくてもいいんじゃない？本当のことなんだからさ。その制服の上に付けてる白いレースのエプロンも千鶴ちゃんに似合つてるよ」

「に・・つて！総ちゃんはいつもそんな風に私をからかうし、恥ずかしいに決まつてるでしょ！もう、総ちゃんのバカバカ～～！！」

そう言いながら、千鶴はせめてもの抗議と、総司の腕をボカボカと叩く。だが、千鶴の力では痛くもなんともないのだろう、総司は千鶴を見下ろしながら笑い声をあげている。

そんな二人の様子を微笑ましく感じながら近藤が優しい眼差しで二人を見守っている。

「本当にお前たち兄妹は仲がいいな」

総司と千鶴の動きがピタリと止まり、近藤へ視線を向けると、その言葉へと耳を傾ける。

「天国にいる君らの両親も安心しているだろう」

「近藤さん・・・」

「総司、千鶴くん——すまんな。本来なら俺も一緒に沖田の・・・君たちの両親の墓参りに行きたかったんだが・・・」

出張で行けなくなつてしまつたと、申し訳なさそうに目を伏せる近藤に総司と千

鶴はそつと首を横に振る。

「そんなことないです。近藤さんがお忙しいのは分かつています。こうして私たちを引き取つてくださつただけでも感謝しているんですから」

「そうですよ。両親を亡くして身よりをなくした僕たちを、父さんの友人だった近藤さんが引き取つてくれた。——僕たちも両親も近藤さんには感謝しています」

「総司、千鶴くん・・・ありがとう」

「それは僕たちのセリフですよ」

「ありがとうございます、近藤さん」

「総司つ、千鶴くんつ！！」

感動に涙しながら近藤は二人を強く抱きしめた。

「あはは・・・近藤さん、苦しいですってば」

「おおつ！－すまん、すまん」

総司の言葉にパッと腕を離すと、近藤は照れ笑いしながら頬をボリボリと搔いた。